

私たちが忙しいのは結婚式だけではなくて、これから先生の親戚の方が亡くなったので、弔問に行かなければならなかったからだ。彼女やご遺族の方には申し訳ないが、旅人である私にはめったにない巡り合わせであった。

彼女や彼女の親戚はバリでは数少ない仏教だという。玄関先には造花の花輪が壁に立てかけられていた。箱型の提灯には故人の名前が書かれていた。室内に入ると、すでにご遺体納棺され、しかも二度とその蓋は開けられないように

なっていた。日本のように小窓もない。中には日本と同じように故人が愛用していた物や、飲食物が入られるそうだ。

お棺の上にはレースの布がかけられ、その上は造花で覆われていた。興味深かったのは頭側に天使の人形が立って

いたことだ。お棺は腰高になっていて、その下には、ヒンズー教のお供え用の生花が敷き詰められていた。臭い消しのためでもあるらしい。反対側には白布で覆われた机があり、日本の仏教と同じように山盛りにしたご飯にお箸が日本垂直に立っていた。飲み物、お菓子、果物。お線香は長く、臭いがいい。僧侶から手渡されたそのお線香を頭上に掲げて黙祷し、それを僧侶に渡すと僧侶がお線香たて？に立ててくれる。その机の足元には2対の菊の花が置かれていた。

二日後、私は黒いブラウスを買って、お葬式に参列させていただいた。

日本的に言えば火葬場だろうか。屋根こそあるが吹き抜けのそこには椅子が並べられていて、参列者が談笑しながら

座っていた。そう、談笑！ゲームをしている子供もいる。服装も普段着のままの人が多い。保冷箱に入れられたコス（ビニール袋に詰められたアイスクャンディー）を先生のお父さんがみんなに配って歩く。そんな中で近親者だけは、病院の検査着みたいな服を着て、僧侶の指示に従って動き回っている。私は恐縮しながらもそれらの様子をすべて写真に収めた。そのたびに黙礼を繰り返す。

家から運ばれた棺の前には、家にあったよりも大きな白布で覆われた机があり、赤い木製の家が置かれた。

庭までである。一見して平和で幸福な感じの家庭の象徴みたいな家だ。

「天国へ行っても困らないように、そして楽しく暮らしてね」という意味があると先生の妹さんが教えてくれた。

急にその妹さんが「早く、こっちへ来て」と私を引っ張る。人々も寄ってくる。いよいよ火葬にされるのだ。

青色の大きなドラム缶みたいな内側には白い綿のような断熱材がはってある。その中に棺が収められた。

私たちは紙の箱に入れられた昼食をとりながらその時間を待った。目の前の煙突からは煙があつという間に立ち昇る。

テーブルでお経が流れたいたはずなのに、それが演歌のような曲に変わった。故人の好きな曲だったのだろうか。

その後の儀式を私は驚きのあまり口を開けたままじっと見つめていた。ハンカチで口元を押さえながら。目の前には骨となってしまった故人が横たわっていた。それに火葬場の係員がホースで水をかける。

熱い骨からは湯気がたちどころに上がる。独特な臭いも立ち上る。日本のような厳粛さは微塵も感じられない。焼きすぎと感じるほどの骨を手早く塵取りのような物に集めていく。あっという間の出来事だった。人々が席に戻る。先ほどまであった幸福の象徴のような家は火葬場の後ろで火柱をあげ、煙と化して天に昇って行った。広くなった机の上では想像もつかないことが行われていた。白い布製の袋には骨から大粒の灰になった故人が入っていた。その灰で僧侶が人形を器用に作っていく。頭、胴体、手足。盛り上がった胸部までである。髪の毛の代わりにはヒンズー教のお供え用の花の中にあるひげみみたいな植物。思わず笑ってしまったのはそのひげみみたいな植物でアンダーヘアまで描いてしまったからだ。指や顔の造作はやはりヒンズー教の代表的な花であるプリメリアの花びら。最後にその人形にミニチュアのようなブラジャー、パンツ、ブラウス、スカートを着せる。その人形の横に置かれた小さな骨壺と小船。その小船に骨壺に収められた骨を乗せて海に流すのだそうだ。

今まで、ヒンズー教の葬列を3回も見ることがあった。それだけでも驚きであったが、今回はまじかに中に入ってそれを体験することができた。仏教とはいえ、ヒンズー教とキリスト教の混じったようなお葬式。私はその夜、異文化が私の体を埋め尽くし疲れ果てて眠り続けた。